

# 第1章 戦場

## 中国での戦い① 銃撃を受けた傷跡

馬場芳彦さんのお話から

○下関 山口県の南西端にある市。

○釜山 朝鮮半島の南東端に位置する港湾都市。

表紙裏地図

○満州 中国東北部。

○長春 表紙裏地図

○琿春 中国、吉林省の

県。清初期より朝鮮との

国境紛争の地。表紙裏地

図

○工兵隊 鉄道・通信な

どの技術的任務にあたる

兵士。

○手榴弾 手で投げる小

型の爆弾。

○外地 内地以外の領有

地。朝鮮・台湾・樺太など

の総称。

○三角巾 三角形の包帯

私は、昭和十九年（一九四四年）に仙台の学校を出て、下関から船で渡り、釜山へ行きまし  
た。そして、釜山から汽車に乗って北に上がっていき、満州の今は長春と言っていますけれど  
も、一番大きな街で働いていました。そのうち、その年の十月に琿春の百十二師団工兵隊に入  
りなさいという命令があって、そこに行きました。

ソ連は、昭和二十年（一九四五年）八月八日に参戦し、国境をやぶって攻めてきました。そこ  
で、私たちは、すぐに山の陣地に入って、橋を壊さないと戦車がどんどん来るものですから、橋  
を爆破したり、夜の闇に乗じて戦車を攻撃に行ったり、攻めては退き、攻めては退きを繰り返  
しました。兵力も火力も弾薬も不足していたために、ほとんど手榴弾での戦いでした。ただ、  
手榴弾は三十メートルぐらいしか投げられません。それで、二十四発の手榴弾を一箱置いて、そ  
れを投げながら攻めてくる敵を防いでいたのです。突撃したり戻ったりの繰り返しです。

日本では、八月十五日に、天皇陛下の声で終戦だ、戦いはもうやめなさいということと言わ  
れたので、日本の内地ではやっと戦争が終わりました。ところが、外地では停戦の命令、戦争  
をやめてもいいという命令が来ないために、そこでは相変わらず戦争をやっていたわけです。  
私たちは、生き残っていた十七名で最後の八回目の突撃をして、ほとんど死んでしまいました  
た。私はたまたま生き残りました。

私は、銃撃で足をやられてしまいました。最後の突撃で、左の肩の肉をとられて、肩がだめ  
になっておりました。三角巾で巻いて、まだ命があったものですから、立ち上がって後方へ下

布。  
○くぼ地 周囲より低く  
なっている土地。

がろうと思つて横を見ると、マンドリンという短い銃で狙われていたのです。これは、一分間に七十二発の弾が飛び出すものです。ごく近くから狙われたものですから、あわてて、くぼ地に伏せようと思つて飛び上がったところで、「だだっ」と足に弾丸が入りました。全身を大やけどしたような、すごく強い衝撃を受けて、目がぐるぐると回るような感じがして、思わず、頭をやられたかと思つて頭に手をやったら、顔にべつとりと血がついていました。これは頭をやられた、もう駄目かと思つたのですが、それは倒した相手の返り血を浴びていたのです。そのうちに、足の先がじゆくじゆく濡れてきたのです。血が足先の方へ行ったのです。足をやられたので、止血をしなければ死んでしまいました。そのときに、暗闇の中で動く人がいたので、それは兵隊だったので、彼は朝鮮人の初年兵で、彼に、足をやられたから止血してくれと言ひ、三角巾で大腿部（ふともも）を締めてもらいました。

そのまま気が遠くなってきたのですが、遠くの方で「停戦」という声が聞こえたような気がしました。また、聞きなれないソ連兵の会話も聞こえました。後で分かったのですが、そのソ



手榴弾での戦い

イメージ図

○捕虜 戦争などで敵に捕らえられた人。

○側溝 道路・鉄道などに沿って設けた小さな排水路。

連兵は、戦場でやられたソ連の兵隊を助けに来ていたのです。

戦争中は、生きて捕虜になつては駄目だ、いつでも死になさいという教えがあつたのです。それで、死ななければならぬと思つたのですけれども、がけから転がり落ちて身を隠そうと、いうことで、這つていって、がけから落ちたのですが、たまたま山の道路の側溝の中に転がり込んだのです。そこにうつ伏せになつたままです。いましました。

そのうちに、停戦になつたようで、これは大変なことだ、捕まるなど思つていたら、トラックが横づけになつて、足と手を持たれてどんとトラックの上に投げ上げられました。それで、まっすぐ琿春にあつた彼らの野戦病院に連れて行かれました。捕虜になる屈辱感はありました。が、たまたま腰に自決するための最後の手榴弾

を持っていたので、行きつくところまで行つてみようという覚悟を決めました。

その病院には、日本人の負傷兵が十名ほど收容されておりました。ソ連の負傷兵は皆、わらわら布に毛布を敷いて寝ていたのですが、私たちは捕虜ですから、コンクリートの上にじかに寝か



イメージ図

收容所に連れていかれる兵隊

○延吉<sup>エンチー</sup> 中国東北地区、吉林省延辺<sup>えんぺん</sup>、朝鮮族自治州にある市および旧県名。表紙裏地図<sup>🗺️</sup>

○ウラジオストク 表紙裏地図<sup>🗺️</sup>

されて、敷物<sup>しきもの</sup>もなければ何も無いわけです。裸<sup>はだか</sup>一貫<sup>いつかん</sup>でそこに寝ていました。その後、延吉<sup>エンチー</sup>といふところに収容<sup>しゅうよう</sup>され、その陸軍病院で治療<sup>ちりょう</sup>を受けました。

当時、病院では日本兵は朝鮮から日本にどんどん帰っていたので、当然、私も日本に帰してもらえるものだと思っていたのですが、退院してから、北の方に約二百キロの距離<sup>きょり</sup>を四日ばかりで歩いて行って、ウラジオストクの後方<sup>こうほう</sup>にある収容所<sup>しゅうようじょ</sup>へ連れていかれました。大体百二十人ぐらいの編成<sup>へんせい</sup>で国境<sup>こく</sup>を越えていきました。私は裸<sup>はだか</sup>だったので、捨てていく人のものを拾<sup>ひろ</sup>って自分<sup>自分</sup>のものにしていったのですが、あまりに荷物<sup>にもの</sup>を持ち過ぎて歩けなくなったところ、後ろから鉄砲<sup>てつぽう</sup>を持った兵隊<sup>へいたい</sup>がどんどん歩けと言うのです。ソ連の監視兵<sup>かんしへい</sup>にばんばん撃<sup>う</sup>たれながら二百キロの道を歩いていきました。

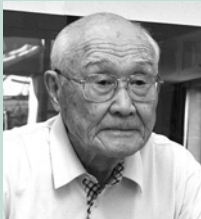
私は、ウラジオストクで、石炭<sup>いしたん</sup>の貨車<sup>かしゃ</sup>おろしをやりました。一人一日で約十八トンの貨車<sup>かしゃ</sup>から石炭<sup>いしたん</sup>をおろさなければならぬのです。それから、五十トンの貨車<sup>かしゃ</sup>から二人でおろさなければならぬというノルマ（目標<sup>めく</sup>）が課<sup>か</sup>せられて、それが達成<sup>たっせい</sup>されないとご飯<sup>はん</sup>の量を減<sup>へ</sup>らされるのです。残業<sup>ざんぎょう</sup>もありました。

戦争<sup>せんそう</sup>をしていると、本当に鬼<sup>おに</sup>か蛇<sup>じゃ</sup>になって相手に突<sup>つ</sup>込んでいくということ、人間<sup>にんげん</sup>らしさは無<sup>な</sup>くなってしまいます。そういうむごすぎる戦場<sup>せんじょう</sup>での体験<sup>たいけん</sup>、そして三年間の苦しい長いシベリア<sup>シベリア</sup>の生活<sup>せいかつ</sup>、そのようなことはこれからの若い人<sup>若い人</sup>たちに経験<sup>けいけん</sup>してもらいたくありません。この体験<sup>たいけん</sup>を後世<sup>こうせい</sup>に伝えていただきたいと思います。

DATA

平成22年度南区平和事業  
聴き取り

- ・平成22年9月17日
- ・真駒内五輪児童会館



馬場芳彦(ばば・よしひこ)さん

- ・大正14年(1925年)生まれ
- ・札幌市南区在住